

同化と異化のはざままで

大城立裕



同化と異化のはざまで

— 大城立裕

大城立裕（おおしろ・たつひろ）

1925(大正14年)、沖縄県生まれ。上海の東亜同文書院大学に学んだが、終戦の年、大学閉鎖のため退学。戦後、琉球政府に勤務のかたわら創作活動始める。「カクテル・パーティー」で昭和42年上半期の芥川賞を受賞、沖縄初の芥川賞作家となる。小説に『カクテル・パーティー』『小説 琉球処分』『ばなりぬすま幻想』『恩讐の日本』、エッセイに『現地からの報告・沖縄』『内なる沖縄』
現在、沖縄県立沖縄史料編集所長。那覇市在住

同化と異化のはざままで

初版印刷 1972年6月10日

定価680円

初版発行 1972年6月25日

著 者 大 城 立 裕

発行者 碓 井 昭 雄

発行所 株式会社 潮 出版 社

〒160 東京都新宿区南元町14の1

電 話 (357) 7111 振替 東京 61090

印刷／奥村印刷

製本／牧製本

© 1972 Tatsuhiko, Oshiro. Printed in Japan

は
し
が
き

一九七二年五月十五日で、第二次沖縄県民とでもよぶべきものが生まれた。文学史でたとえば第二次「新思潮」などというものとは違った、深い意味あいのものであろう、と思う。第一次沖縄県民とはいってもなく一八七九年（廃藩置県＝琉球処分）から一九四五年（敗戦）までのものである。この第一次と第二次とのあいだに、「県」を紛失させられた（あるいは「県」の幻想から覚めた）民はどのように育ったか、を考えるのに、この本は役立つかと思う。こういう日本人が、まぎれもなく存在した。あるいは逆説的に、一面の日本人論にもなるうか。

Ⅱの十一篇は、『早稲田文学』に昨年四月号から一年間にわたって連載した「沖縄通信」である。連載のあいさつで私は、つぎのように書いた。

「気ままな沖縄通信をさせていたくことになった。ルポルタージュのようなかたちをとりたくない。生活寸描、心象風景のようなことになるかも知れない。じつは、そのほうが沖縄のほんとうの姿をうつしだせるような気がする。月々のまとまりも気にしないことにする。連載をかさねているうちに、沖縄の実相というものが、たとえば口はばったいがチェホフの描きだした人物が、その体軀を両の掌でつかんだような質感、量感をもっているように、うかびあが

るようでしたら、と考えている。そしてそれは、沖縄でもヤマトでも、かなり多くのひとが首をかしげて、『そうかなあ』とつぶやくようなものになるかも知れないが、そのほうがほんとうなのだ、と思う。」

というわけで、十一篇のそれぞれにつけたタイトルは、便宜的に中身の一部分をあらわしたもので、中身がじつは雑多な話題に割れている。沖縄の静と動、真面目と不真面目、個と群、笑いと嘆き、旧と新、美と醜、緊張と弛緩、利口と間抜け、あるいはそのどちらか判じかねるものを、ごったに詰めてみた。そして、みんな私の個人生活を素材にしたホンネであるということが共通している。タテマエにこだわらないところが、あるいは私の身上かと思っている。

Iの各篇は、それぞれ一応まとまった話になっていて、比較的到手とりばやく、第二次沖縄県民の思想をうかがうことができるかと思う。

Ⅲは、私の日本人意識の原体験を書いたものである。ここには、日本人として育ってきた個人の羞じらいがある。このような羞じらいは、沖縄のほとんどの人があからさまに伝えることをためらってきたものであり、そのためらい自体がまた、沖縄の歴史の秘密にかかわったものであった。山之口獺はそれを詩的表現に託したが、私はここに露骨な散文の告白とした。一九六九年——おそらく沖縄の人間として最初の試みであり、おそきに失したものであろうか。なにしろ勇気が必要とした。敗戦から二十四年、復帰までわずかに三年という時点での懺悔録

のようなものだ。

Ⅲ「沖繩で日本人になること」の延長上に明白にⅠの「同化と異化のはざま」を置くことができるし、これらには生まれたⅡは、その実生活にあらわれたディテイルとあってよい。これだけを一冊にしたら、当分このような文章を書くにも及ばないような気がしている。Ⅱの各章など一片の時事といえども、その後、一年の移ろいを省みて、第二次沖繩県民生成の歴史とはこういうものか、というそこはかとなない感慨がある。幾十年後かに、あるいは歴史の裏通りを垣間^{かいま}見せる雑文になろうか。

末筆ながら、早稲田文学の編集長として私に機会をあたえて下さった有馬頼義氏と、この一冊の出版を進めて下さった潮出版社の鈴木征四郎出版局長と刈谷孝興氏に、とくに深く感謝の意を表したい。なお、巻末の年表も潮出版社の労作に仰いだことを、附記しておく必要がある。

一九七二年五月

大城立裕

目

次

はしがき 2

I

同化と異化のはざままで 11

米軍基地のなかの生活 25

日本人による植民地支配の原型 37

II

毒ガス騒ぎのなかで 53

手書きの力作二つ 73

KJ法と沖縄 93

英語センターのことなど 111

返還協定の流れのなかで 131

歴史民俗資料展 151

沖縄開発シンポジウム 171

小桜の塔供養 193

ドル・ショックなど 211

11・10前後 239

海洋万国博・沖縄 259

III

沖縄で日本人になること 281

———このころの自伝風に———

付 沖縄戦後史略年表 333

カバー写真 福井喜美子

装幀 山田脩

□収録論文

同化と異化のはざまで	『朝日ジャーナル』一九七二年五月十九日号
米軍基地のなかの生活	『潮』一九七一年十一月号
日本人による植民地支配の原型	『潮』一九七二年六月号
毒ガス騒ぎのなかで	『早稲田文学』一九七一年四月号
手書きの力作二つ	同 一九七一年五月号
KJ法と沖縄	同 一九七一年六月号
英語センターのことなど	同 一九七一年七月号
返還協定の流れのなかで	同 一九七一年八月号
歴史民俗資料展	同 一九七一年九月号
沖縄開発シンポジウム	同 一九七一年十月号
小桜の塔供養	同 一九七一年十一月号
ドル・ショックなど	同 一九七二年一月号
11・10前後	同 一九七二年二月号
海洋万国博・沖縄	同 一九七二年三月号
沖縄で日本人になること	『わが沖縄』上・谷川健一編・木耳社刊

同化と異化のはざままで

——沖繩文化史の第二の転形期は可能か

ことしになってから私にとって非常に印象的な事件が、二つあった。一つは「鹿山事件」であり、もう一つは「沖繩方言裁判」であった。私はかねてから、沖繩問題は政治問題、経済問題であるより以上に文化問題であると考えているが、「七二年返還」ということを眼の前にして皮肉にもこの二つは「返還」そのものをも疑わしめ、しかしさらに、その疑うことをも疑わしめる、という複雑な問題を私につきつけた。これはやはり文化史の問題なのである。

鹿山元兵曹長が戦争中に久米島で行なった虐殺事件を、あれは当然のことであったと開きなおった理由について、私の周囲に二つの意見を聞いた。一つの解釈として、このごろはやりの「開きなおり」つまり窮鼠の猫をかもうとする姿勢であり、鹿山の場合は自分の罪を問われる前に相手を先制しよう、ということであろう。これに似たものに「沖繩を甘やかすな」という

姿勢があつて、罪の意識を持続するのに耐えられない日本人の性質をよくあらわしているように思う。沖繩からの糾弾にたいして本土のがわから今に開きなおる姿勢がでるのではないか、少なくとも復讐の時点を境にしてそれに転じるのではないか、ということは、かねて私たちの予感してきたことであつた。その予感のゆえに本土不信の言葉をもっと節約すべきだという声もあつたが、だからといって、現にこのように開きなおりがとびだしてくると、「節約」をすめたひとさえも、激怒する。それが沖繩の不幸な精神の現実である。もう一つの解釈は、罪をみとめて謝罪したらどんなに沖繩がわからいじめられるかということ、鹿山が恐れたのであろう、ということだ。はたして謝罪したらどういうことになっていたか、そう単純に憶測できることではないが、しかし「宥す」と言つたひとが案外いたのではないかと私は思う。沖繩人は元來そのように平和的なのだ。

二十数年をへて、なおそれほど怨念が煮え沸ることを、鹿山は予想しなかつたであらうし、本土ではたしかに一般的にそういう想像が難しいらしい。「いまさら」という批判の聲が、やはりあつたようだ。たしかに単なる過去の事件にすぎないならば、時効にかかるべき性質のものであろう。しかし、久米島住民ないし沖繩の民衆一般にとって、あれはただの「過去」ではなくて、「現在」を説明するに足る過去である。そして、さらにさかのぼる「歴史」をひきずつた過去完了である。言いかたを変えれば、このような反応のしかたを見て、「いまさら」と

言うよりは、あの「過去」にたいしてなお憤りと怨みを発しなければならない「現在」とは何であろう、あるいは「歴史」とは何であろう、ということを考えなければならないのではないか。

その「現在」の意味というのは、性懲りもなく再び日本の軍事植民地、差別支配の対象となろうとする動きへの不安にみちている、そのことだ。不幸な歴史はまだ改まらないのか、ということだ。ヤマトの沖繩にたいする意味、沖繩のヤマトにたいする意味は、あの時も今も変わらないのだ、ということ、この鹿山事件における住民の表情は示している——このことは端的に言えるであろう。世のある種の人々にとっては常識である。

さらにしかし、私にはなお気になることがある。テレビにでた島民の一人の告白によると、かねて現地では「鹿山が懺悔して仏門に入った」という流説があったそうである。この流説はいかにして生まれたか。私なりの解釈では、やはり島民の歴史的な願望のあらわれであり、そのような懺悔の姿を見ることによって、自分の悲しみもやすらぎ、ヤマトへの怨みも忘れることができる、ということではないか。ほんとうはヤマトへの怨みをいつまでも持ちたくはない、という沖繩人の真実は、敗戦後数年、まだ戦争の記憶も生々温かなうちにはやくも素朴無条件に祖国復帰運動がおきたことでも理解できようが、現にこの久米島にこのごろさやかれるというつぎの言葉にも読みとれるであろう。「アメリカ世ヤのうちらならばむきになって喧嘩もでき

たろうが、これからはヤマト世になるのだから、知らんぞ」——これはまことに深刻なささやきである。

アメリカと日本とどちらが沖縄人にとっては恐いのか、とは年久しく私の疑問である。米軍司令部ヘデモをかけたのは、たぶん一九五八年がはじめである。その前までは左翼学生のデモでも米軍をさけて主席公舎へ場違いのようなデモをかけることが多かった。主席が緩衝地帯としての責任を持つべきだというのは、ひとつの理屈であって、やはり米軍は恐いものであったのだ。そのうちに米軍のかわりに日本政府沖縄事務所が襲われるようになった。これは、やはり日本政府の責任を問うたものでもあろうが、他にまた「甘えた」感がなくもない、というのが私の推定である。復帰運動の八合目あたりまで、運動主体の意識のなかに、そのようなものがあつたと思う。しかし、復帰が眼の前に近づいた、つまり昨今であるが、その日本政府がだんだん恐いものになってきたフシがある。過日、全軍労ストライキの煽りで基地内営業のできなくなった業者たちが主席公舎の門前に群らがった。これも筋違いというべきもので、彼らは米軍司令部か沖縄事務局ヘデモをかけるべきであつたらうに、それをなしえなかったのである。う、と私は思う。政府権力の強さを発揮するものとして、かつて米軍は恐いものであつたが、そのころは同民族として甘える相手であつた日本のその政府が、こんどは中央権力としてのイメージをよみがえらせる季節を迎えた、ということになりそうである。